

富雄地区子ども安全対策協議会（奈良県）

奈良からまいりました安達と申します。荒木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

最初にお断りしておきたいのは、防犯活動は地域によって違いますし、ボランティアによっても違いがあります。それぞれの地域における特性がありますので、必ずしも私が今から申し上げることが良いということではないことを前提として、少しお聞きいただければありがたいと思います。



活動地域の紹介

この写真は富雄地区を撮影した航空写真です。地区の世帯数は約 5,400 世帯、人口は約 13,500 人。まだ、少しずつではありますが人口は増えています。子どもも増えております。地区内の集合住宅については 62% を占めており、地域活動を考える場合は戸建住宅、集合住宅、マンション等、いろいろな活動上の差があります。



団体の概要 ～楓ちゃん事件を通じて～



富雄地区では、平成 16 年 11 月 17 日に富雄北小学校の 1 年生だった有山楓ちゃんという女子児童が誘拐殺害され、そして遺棄されるという事件が発生しました。

私どもは「富雄北小学校の」とは言わず、「楓ちゃん事件」と言い続けております。

これは楓ちゃん御両親の願いでもあります。「楓を忘れてくれるな」ということで、我々は今でも「楓ちゃん、楓ちゃん」と言っております。「地域は一人の少女の命を守れなかった」ここが私たちの活動の原点です。楓ちゃん

ん事件を振り返ってみたいと思います。事件の発生は平成 16 年 11 月 17 日。被害者は下校途中の小学校 1 年女児の有山楓ちゃん 7 歳。こういう性犯罪の被害に遭うのは 7 歳が多いようです。これは本当に頭が下がりましたが、奈良県警さんの努力で翌月の 12 月 30 日に犯人は逮捕され、地域としては、やはり安堵したということは偽りない心境でした。犯行現場については、連れ去り現場と殺害現場と遺棄現場の 3 つに分かれています。私は当時、マスコミの方からいろいろ取材を受けましたが、「安達さん、犯人が憎いですか」「犯人は怖いですか」というのがだいたいのマスコミの質問でした。それはそうだけれども、そうではなく、私は「一人の少女の命を守れなかった」という地域としての

無念さと反省しかありません。「この反省なくして楓ちゃん事件の今後の対策はありません」と言い続けてきました。この事件は富雄地域の地域活動の在り方そのものであり、活動内容を問い直す機会となったわけであります。

皆さんも御存知のように集団登下校活動で完璧に見守っても、子どもが犯罪から守られるのは、全国にいろいろなデータがありますがけれども、だいたい15%といわれております。

つまり、85%はもっと別の手段がいるということです。その安全安心のまちづくりの手段として、集団登下校もあるという位置付けをしております。



まず、これが連れ去り現場であります。そして、5つの自治会のマンション群がこの周りにあります。通りには木がありまして、約2メートルの青い塀が約60～70メートル繋がっています。これは何かと言いますと、青い塀の向こう側には戸建住宅があり、防音と目隠しとなっています。ここを楓ちゃんたちが通っていたのです。小宮先生のお言葉を借りますと、当然入りやすく見えにくい環境であります。これは、楓ちゃんの自宅から約200メートル先の路上で、マンションに逃げ込もうと思っ

ても、いわゆるゲートッド・コミュニティと言われているように鍵は掛かっている。誰もいない、逃げ込もうとしても入れないというマンション群であります。そして幹線道路。道路サイドには防護壁。ここは、日中の人通りが少ない時間帯。犯人は知能犯だと考えております。これが事件の関係地図です。それぞれ、連れ去り現場、殺害現場、遺棄現場となっています。

私どもは毎年11月17日には必ずお参りをしていますが、今でも現場に行くと涙がこぼれます。

事件直後の対策 = 見守り活動実施へ =	
11月18日昼	警察・地区団体代表者が緊急会議
11月18日夜	緊急自治会長会議
	① 事件の概要と当面の対処方針 ② 全世帯、見守りチラシ5,000枚
11月28日	「集団登下校」自治会長会議
	① 基本理念&実施計画 ② 自治連合会が主導 ③ 保護者責任論 ボランティア確保
12月6日	集団登下校 無事スタート

事件直後、私たちががどの様な対策をしたのかについてですが、事件翌日の昼には警察と地域団体との緊急会議、夜には自治会長会議を行って、事件の概要と当面の基本的な対処方針等の協議をしました。子どもを見守ってほしい、声をかけてほしいという見守りチラシを5,000枚印刷して、19日には全自治会に配りました。その後は自治会長会議を行い、集団登下校に関する基本理念や自治計画、自助・共助・公助について協議を行いました。

その当時、奈良市西部地区に居住する奥様方の就業率は約41%でした。乳飲み子を抱えたり、介護を抱えています。もし、学校外の通学路は保護者の責任だといった場合、付き添いを行うためには仕事も辞めなくてははいけない。私たちは、「社会環境、社会的、経済的にもそんなことはできない」という考え方から、学校外の通学路については自治連合会が主導することとなりましたが、自治会長会議では一番もめました。

集団登下校の理念 ～子どもを一人にしない～

そして、事件から19日後の12月6日、集団登下校がスタートしました。

集団登下校を実施するに当たって、「子どもを絶対一人にしない」「家から学校まで、学校から家まで一人にしない」という基本原則の下に4つの理念を考えました。

この理念は今でもそのまま掲げて活動を続けております。

まず1つ。当たり前のことかも知れませんが「子どもの安全」「集団登下校での子どもの安全」です。

この集団登下校が完全な制度でない限り、保護者たちは子どもたちを集団登下校のシステムに預けたとしても、

「不安だからやはり私が行くわ」となってしまう。だから、制度そのものは保護者の信頼に絶対応えなくてはならないということが大事でありました。

それが地域主導の公助であり、地域が集団登下校を行って子どもを守ろうというのが第一の理念であります。

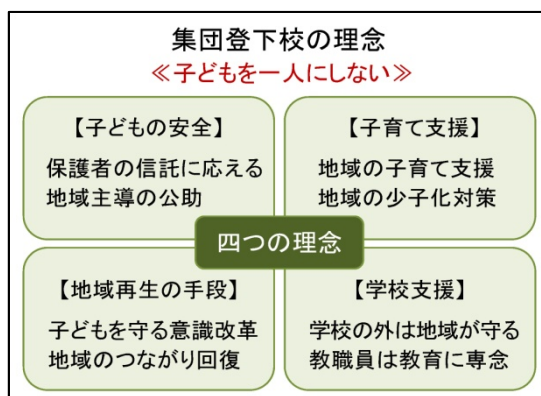
2つ目に我々が当時考えたのは、「富雄地区は子育てにやさしいまちづくりをしようじゃないか」ということです。この活動は地域の子育て支援、お母さんの子育て支援だと。

サザエさんの3世代を見ていただいてもわかりますように、波平さんとフネさんがワカメちゃんと孫のタラちゃんの面倒を見る。真ん中のマスオさんとサザエさんが働く。これを地域に置き換えれば、地域が小学生、子どもたちを見守るのは当然ではないかというのが考え方であります。そして、これが地域でできる少子化対策ではないかと考えたわけであります。

3つ目についてですが、事件が発生した時、学校はパニック状態でした。私たちは学校の先生に「学校の外は地域が守るから、先生は教育に専念して下さい」「学校の中では子どもをよろしく願います」という強いメッセージを発することが必要だと考えました。

その当時のことを先生方に聞きますと、「本当に安心した」というお言葉を返していただいておりますが、今でも「学校の外は任せなさい」と学校に言っております。

この集団登下校は「地域再生の手段」、つまり「安心・安全のまちづくりのための集団登下校にすぎないのだ」と考えました。先ほど申しましたように、集団登下校で子どもたちを守ることができるのが15%ですから、残り85%は別のいろいろな地域の活動でやらなければならないのです。



集団登下校システムについて

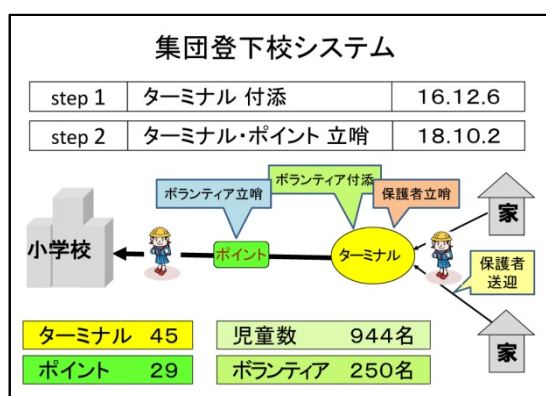
私たちが実施している集団登下校システムについて説明します。事件発生当時の集団登下校システムについては、ボランティアによるターミナル方式の付き添いを行いました。

ターミナルとは、家の近所にある集合場所を言います。ターミナルは全部で45か所を作りました。各家庭からお母さんたちは子どもたちを近くのターミナルまで送ります。ターミナルからはボランティアが子どもたちに付き添って学校まで送り届けるといいます。帰りはその逆であり、ボランティアが子どもたちに付き添って学校からターミナルまで送り届けて、保護者がターミナルまで迎えに来ます。そうすることで子どもを一人にしないわけでありました。当時の富雄北小学校の児童数は944名。ボランティアも計算上250名以上が必要となることから、自治会長さんの協力により1週間くら

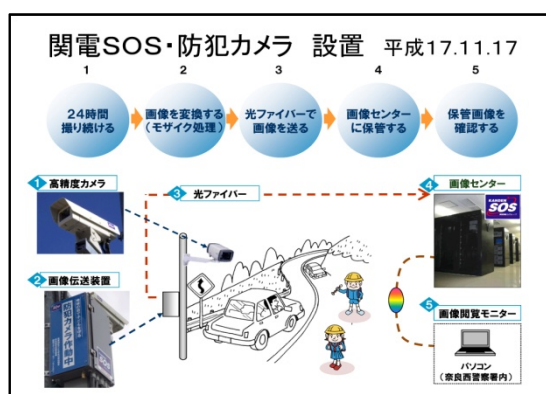
いで 250 名を集めていただきました。ターミナルの中には、学校から一番遠いところで約 1.5 キロもあります。往復すると 3 キロで郊外もありましたが、このシステムを約 2 年間実施しました。

そして、平成 18 年 10 月 2 日からはボランティアの負担軽減を図ることを目的として付き添い方式ではなく、ターミナルと立哨ポイントによる集団登下校システムに変更しました。付き添いによる活動を続けるには難しいだろうということから新しく 29 か所の立哨ポイントを作って、そこにボランティアを配置して子どもたちを見送ろうではないかと考えました。つまり、保護者は毎朝ターミナルまで送っていき、各ポイントに配置しているボランティアさんが集団登下校する子どもたちを見送るという形で現在は進んでおります。

これは現在の登校風景であり、通学路の立哨ポイントにボランティアさんが立っています。集団登下校をするチームごとに旗を持っていますので、ボランティアが旗を確認することによって全ての子どもたちが通過したかを把握します。この集団登下校は、「自分の大切な友達を守って下さい」という楓ちゃんの遺産の制度だと思っております。



街頭防犯カメラの運用



私たちの地区には 4 か所 8 台の街頭防犯カメラを設置しております。楓ちゃん事件発生から 1 年後の平成 17 年 11 月から運用を開始しておりますが、関西電力の子会社である関電SOSという防犯カメラの会社から富雄北小学校の通学路をモデル地区にしたいとの御提案がありまして、奈良県警察、奈良市さんの御協力などにより実現することができました。システムについて説明すると、この街頭防犯カメラは高性能なカメラであり、夜間も遠くまで撮影することが可能なもの

です。録画した内容を柱の下側にある画像伝送装置に移して記録を暗号化し、光ファイバーケーブルにより大阪の画像センターに送り一定期間保存します。その周辺で何か事件があれば警察からの依頼により画像を閲覧することになりますが、これは一定のルールがあります。私たちのまちを管轄している奈良西警察署内に画像閲覧モニターというパソコンが置いてあります。お巡りさんがいつでも見られるかというそうではなく、何かあった場合、いついつの何時から何時何分までの録画内容を確認

認したいという了解を私に求めてきます。そして、閲覧について了承しますと関電SOSさんからIDとパスワードを与えてもらい、見るができます。これまでに私自身が1回も録画内容を見たことがないというくらいプライバシーを安全に保護しています。

設置費用については約560万円かかりました。モデル地区ということもあって、費用については関電SOSさんに全部出していただきました。ランニングコストは年間120万円前後であります。これは奈良市さんに全額負担していただいております。つまり、これは富雄の子どもを守る活動に関して、行政を含めて地域の皆さんが毎年富雄地区のためにお金を出していただいているという感謝の念で、この運用を行っております。

初心を共有するためのフォーラムの開催

富雄地区子ども安全対策協議会では、「楓ちゃん事件の発生を許したという地域の反省がなければ見守りは長続きしない」「もう一度初心に返って考える」を合い言葉として、平成22年1月に地域住民参加にかかる同種事案の完全防止を誓い合うフォーラムを開催し、鎮魂曲「レクイエム楓の風」を作成するなど、地域における絆の醸成を図るとともに、ボランティア団体としての活動の活性化を図っております。この時は約350名を集めまして、事件の風化防止と初心の共有を目指し、そして未来へ11月「17」という日をつないでいこうと考えました。この初心の共有についてですが、事件以降に富雄に転入してきた人もありますから、新しく来た人は楓ちゃん事件のことを知りません。ある意味では初心がないわけです。したがって、後から来て事件を知らない人も事件を語り、そして初心を共有してもらおうというわけであります。



活動の評価と課題

活動の評価と課題として1つだけ申し上げておきます。まずは子どもの成長です。何かといいますと、4年前のことですが、小学校を卒業するイトウ君という子どもから手紙をもらいました。その手紙には「僕は卒業しました。今度グループのリーダーになるのは5年生の〇〇君です。まだ心もとない。4月になれば1年生も入ってきます。どうぞ指導をよろしく、そして1年生まで見守ってあげてほしい。」ということが書かれておりました。

6年生の子どもがそういうふう to 成長したということです。集団登下校でいろいろなことがあります。もっとのんびりして歩きたいとかありますけれども、やはり子どもが集団行動でしか学べないものを学んでくれていることは大変うれしいことだと思います。

活動の評価と課題

評価	➤ 子どもの成長 <卒業生から届いた1枚の手紙> 集団行動で学ぶ・思いやり・責任感・忍耐力
	➤ 活動が、地域との信頼感を醸成 「自分達は、地域から守られている」子ども達は実感 「知らない人とは、話をしない」子どもの躰を救う
	➤ ボランティア活動・・・住民の相互理解と交流が進む ➤ 子どもへの関心が高まり、地域教育力が向上
課題	➤ ボランティア及びコーディネーターの確保
	➤ 地域を支える人材育成
	➤ 持続可能性を高める施策の推進

課題についてはボランティアの問題でございます。

私は十数年前にスイスのツェルマットというまちに旅行へ行きました。御存知の方もおられると思いますが、このまちに入るには、少し手前の所で観光バスを降ろされて、まちには列車で入って行きます。写真には2頭立ての馬車、小さな電気自動車が見えますが、要するにこのまちは排気ガスを拒否しているまちなのです。まちの人に、冬はどうするのかと聞いたらソリだそうです。「ああ、スイス人って頑固な人々だな」と思いました。「排気ガス拒否でまちを作る」というまちづくり自体が一つのツェルマットの文化になっているのだなと感じまして、安全・安心なまちづくりとはこうでなければならないと思いました。私は、「安全安心のまち富雄地区は、日本のツェルマットを目指す」等とかっこいいことを言っております。御清聴ありがとうございました。



質疑応答

●質問 防犯カメラの性能についてお聞きしたいことがあります。1.5 キロの間に4か所設置されたそうですが、効果的な置き方が気になりました。例えば誘拐事件の現場のような視認性の確保ができないところに設置するのか、それとも大きい道路が通っている幹線道路に置くのか。効果的な置き方がありますか。

○回答 効果の測定というのは極めて難しい問題だろうと思います。もちろん、その後、事件は発生しておりません。例をお話ししますと、「富雄の土地価額が3か所で少し上がっている」「富雄は子どもを守る安全安心なまちということで頑張っている地域だから」とある不動産会社の方から聞きましたが、防犯カメラの効果と言われれば非常に難しいです。防犯カメラがなければ効果はなかったのか、何か事件が発生して防犯カメラにより捕まったら効果があるのか、ということです。ですから私たちは、街頭防犯カメラを据えているということで一つの抑止効果があると考えております。

●質問 先ほど集団下校を行うに当たって、いろいろ長い時間討議をなさったということですが、それでも250名のボランティアさんの年齢層をお尋ねします。

○回答 ボランティアの年齢は、60代、70代以上で約70%ぐらいとなっています。男女別には47～48%でだいたい拮抗しています。

●質問 どういう方法でそのたくさんの方を集められましたか。

○回答 もちろんPRをいたしました。やはり自治会長さんの力です。1週間という短期間で250名ものボランティアさんを集めてくれということを自治会長会議で協議して「これは地域が主導でやる」とか、「いやそうではない、これは保護者の責任ではないか」などとの議論が1時間半くらい続きました。そして、「250名のボランティアをお願いします」と言ったら、みんな怒りました。そんなこと無理だと。これは理屈じゃない。理屈ではなく地域として早くやらなくてはいけないということを議論した結果、自治会長さんが責任を持って集めてくれたのです。あの時はいろいろなことを言われて参ったのですが、自治会長さんが260名ほど集めてくれました。やはり自治会長さんの力はすごいです。今でも感謝しています。